令和５年度　盲グループのまとめ

１　研究主題　「夢や希望をもち、よりよい習慣形成を育むために必要な支援について」

２　研修内容

	日時	内容
第１回	５月 12 日（金）	協議　・グループの研究主題と研究の進め方について
第２回	６月 14 日（水）	協議　・実践事例様式とグループの視点について ・障害種別研修会の講師と講話の内容について
第３回	７月７日（金）	協議　グループの研究主題と研究の進め方について
第４回	７月 25 日（火）	障害種別研修会「全盲の児童生徒の将来の社会自立に向けて、卒業後に必要な力や指導について」（オンライン） 社会福祉法人光道園事務局　企画グループ主任　森下　幹也　氏
第５回	８月 25 日（金）	実践事例に向けての情報共有
第６回	９月 27 日（水）	協議　・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
第７回	11 月 10 日（金）	協議　・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
臨時	11 月 14 日（火）	学校訪問研修会打ち合わせ
学校訪問	11 月 17 日（金）	協議　全盲の児童生徒が夢や希望をもち、よりよい習慣形成を育むために必要な支援について（３名の実践事例を通して）
第８回	12 月７日（木）	協議　事例検討会（４名） ・今年度の研究のまとめ　・視覚障害教育及び病弱教育の専門性について
第９回	1 月 12 日（金）	協議　・次年度の研究方針について
第 10 回	2 月 7 日（水）	協議　・次年度の研究の進め方について

３　今年度のまとめ

盲の幼児児童生徒が将来社会自立に向けて、自ら学ぼうとする力を育むためにはキャリア発達の視点から「夢や希望をもち、適切な習慣形成を育むことが大切である」と考え、本テーマを設定した。

障害の特性により環境の把握や示範の模倣が困難なことから、習慣化が難しい衣服の整理や給食配膳などを取り上げた。課題の手順を端的に伝え、必要な情報を読み取るための手掛かりを教師と一緒に確認したり、自分自身で手掛かりを確かめることができるような環境設定や教材の工夫をしたりすることで、失敗に気付き試行錯誤したり、成功するポイントを考えたりして最後まで取り組む姿がみられた。また、ごっこ遊びや誰かのために手伝いをするなど場面設定の工夫をすることで、個別の授業であっても意欲的に課題に取り組む姿がみられた。

一方で、学習したことを様々な場面に般化させることが難しかった。教員や家庭、寄宿舎などで障害特性を共通理解し、連携しながら工夫して支援をしていく必要がある。

４　次年度に向けて

研究主題「夢や希望をもち、よりよい習慣形成を育むために必要な支援について」を次年度も継続して取り上げる。盲の障害特性への理解を深めながら習慣形成を育むための有効な支援方法について研究を進める。

・１学期：障害特性に基づいた習慣形成を育む支援方法について、事例や文献を持ち寄り、グループ研修を行う。

・２学期：対象児を決めて、実践事例に取り組み、グループで検討する。

令和６年度　盲グループのまとめ

１　研究主題　「夢や希望をもち、よりよい習慣形成を育むために必要な支援について」

２　研修内容

	日時	内容
第１回	５月 10 日(水)	協議　・グループの研究主題と研究の進め方について
第２回	６月 12 日(水)	研修、協議　事例検討①
第３回	７月 25 日(水)	障害種別研修会「日常生活スキルを育む上での困難さや必要な支援方法」 富山県視覚障害者福祉センター所長　高島　豊　氏
第４回	９月 11 日(水)	研修、協議　事例検討②
第５回	11 月 27 日(水)	協議　実践事例を終えての情報共有
第６回	12 月 19 日(木)	協議　・今年度の研究のまとめ、２年間の研究のまとめについて
第７回	２月４日（火）	協議　・次年度の研究の進め方について

３　今年度の成果と課題

今年度の研究では、昨年度の研究を継続し、日常生活に必要な移動や身辺処理のスキルを身に付ける事例を取り上げ、専門性セルフチェックシートや文献などを活用しながら障害特性の理解を深め、実践に取り組んだ。さらに、歩行訓練士や医療機関などの関係機関の専門家、保護者と連携を図りながら、目標設定や環境設定、教材作成など支援の在り方を工夫したりして、昨年度の研究の課題として挙がっていた身に付けたスキルが様々な場面での活用につながるように実践を進めた。

対象幼児児童自らが「～ができるようになりたい」「誰かのためになりたい」という夢や希望をもつことができるような取組を設定し、専門家からの助言を基に、何を学ぶか目標を明確にして、幼児児童が試行錯誤できるような支援を行ったことで、課題に意欲的に取り組み、成功体験を重ね、次の夢や希望につなげていくことができた事例があった。

一方で、家庭や本人自身が夢や希望をもつことが難しく、家庭や関係機関と連携を図りつつも、継続して課題に向き合うことができず、変容に至ることが難しい事例もあった。

４　研究のまとめ

盲の幼児児童生徒が将来の社会自立に向けて、自ら学ぼうとする力を育むためにはキャリア発達の視点から「夢や希望をもち、適切な習慣形成を育むことが大切である」と考え、研究を進めた。

教員だけでなく、養護教諭、栄養教諭、寄宿舎指導員などが様々な視点からアプローチすることによって、幼児児童生徒の実態や支援方法の工夫などを話し合ったり、共有したりした。また、専門家による助言や専門書を参考にすることで、盲児の障害理解を深めながら、対象児に必要な支援や目標、課題などを明確にすることができた。実践を通して、日常生活に必要なスキルが身に付くことが、幼児児童生徒が、目指すゴールに向かって取り組む意欲を高め、夢や希望をもつことにつながったり、さらに大きな目標をもったりすることができると分かった。

一方で、関係機関や保護者と連携を図ったが、目標や課題を共有することが難しかったり、家庭生活への般化につながらなかったりする事例もあった。今後も、保護者や関係機関との連携の取り方を見直しながら、個に応じた指導や支援などの共有を図りたい。日常生活に必要な移動や身辺処理などのスキルを適切に身に付けるための指導や支援について検討し、見聞を広めることができるような豊かな体験活動などに取り組む機会を設定することで、盲の幼児児童生徒が将来に向けて夢や希望をもち、意欲的に学ぶことができるようにしていきたい。